

日本語教授法講義

検証実施機関（団体）：横浜国立大学
 横浜国立大学 教育学部 嶽肩志江

1 検証対象の研修・授業について（該当するものにチェックを入れてください。）

養成／研修	<input checked="" type="checkbox"/> 養成 <input type="checkbox"/> 研修
タイプ	<input type="checkbox"/> 基礎教育 <input checked="" type="checkbox"/> 専門教育 <input type="checkbox"/> 支援員教育
研修・授業日（期間）	2018年10月11日～2019年1月31日
総時間数	24.5時間（全15回） 内訳：通常授業90分授業×12回、 課外活動3回（150分×2回+90分×1回）
研修・授業科目名	日本語教授法講義
受講者	人数（10人） 学年（学部／大学院）：学部3年 専攻：日本語教育8人・英語教育2人 外国人児童生徒等教育／日本語教育に関する経験の有無：宿題教室での支援・教育実習中に有=9人、無=1人

2 地域の日本語教育関係者や学校教育との関わり（大学として、あるいは教員個人で）

（1）周辺の地域の日本語教育関係者／ボランティア等との連携など

大学として：

- 1) 教育学部日本語教育専攻として、横浜市内の公立小学校（横浜市立潮田小学校、横浜市立南吉田小学校）に協力を仰ぎ、「日本語教育実習」を行っている。
- 2) 上記小学校の夏休み課題教室や放課後教室での支援を学生達が行っている。
- 3) 上記以外の横浜市内小学校の国際教室を見学させていただくこともある。
- 4) 2016年～ 横浜国立大学学内予算の支援のもと、国際戦略推進機構所属の教員が中心となり「横国大生による横浜吉田中学校での地域支援活動～DST（デジタル・ストーリー・テリング）プロジェクト」を行っている。

教員個人として：

- 1) 横浜市内の外国につながる子どものための日本語・教科学習支援教室（NPO地球学校「地球っ子教室」、「ユッカの会」）の会員としてボランティア活動を行っている。また、大学生が活動に参加させていただいたり、学習者やボランティアメンバーにインタビューをさせていただく等、授業の課題にご協力いただくこともある。
- 2) 神奈川県内の各地域で活動をしている日本語教育関係者（大学・国際交流協会・NPO・ボランティアグループ等）との交流、学校教育現場やボランティア教室への見学あるいは学校や市教委の先生方との交流を持つ機会がある。
- 3) 横浜市内の国際交流ラウンジ等から講師依頼を受け講座を行うこともある。
- 4) 神奈川県立国際言語文化アカデミアの講師として「日本語ボランティア養成・研修講座」「外国籍県民向け日本語講座」を担当しているため、神奈川県内各地域で活動をしているボランティアや外国

につながる子どもの日本語・教科学習支援を行っている教員、日本語指導員、ボランティア等の方々が受講されていることもある。

- 5) 前述 ((1)大学として-4)) の「横国大生による横浜吉田中学校での地域支援活動～DST (デジタル・ストーリー・テリング) プロジェクト」については、教育学部の学生にも案内をし、毎年、希望学生が参加しているほか、筆者も教員スタッフとして参加した (2016～2017 年度。2018 年度はほとんど関わることができなかった)。

<http://gsfj.ynu.ac.jp/activities/activities2.html> =活動報告

(2) 周辺の学校との交流や共同研究、或いは教育行政との関係など

前述 ((1)大学として-4)) の「横国大生による横浜吉田中学校での地域支援活動～DST (デジタル・ストーリー・テリング) プロジェクト」は、横浜市立横浜吉田中学校からの全面的な協力のもと行われており、国際教室担当教員との連携のもと実施している。

<http://gsfj.ynu.ac.jp/activities/activities2.html>

以上の他にも、2-(1)に記載した通り、教育学部あるいは日本語教育専攻として地域の学校や教育行政との連携や協力関係があるが、非常勤講師という立場上、全容は把握できていない。

(3) 日本語指導や外国人児童生徒教育等に関わる研修など

教員個人として、県内のボランティアグループや、横浜市内の国際交流ラウンジから公開講座などの講師依頼を受けることがある。また、もう一つの所属先である神奈川県立国際言語文化アカデミアの業務として、ボランティア向け養成講座 (日本語ボランティア入門講座、ブラッシュアップ講座、「多言語家族にとって言葉とは」等) の講師をしている。

3 研修・授業の成果について

(1) (受講者アンケートより)

①受講者の研修への期待 (アンケートのⅠより)

-1) 効果的な日本語教授法、説明に困った時にどうするか、やさしい日本語の使い方など、「具体的な教え方や対応の仕方」のスキル獲得に対する期待が高かった。

-2) 「外国人児童生徒の心理や接し方への関心」また、「現場の声 (児童生徒の心情、指導をする先生方や支援者の体験談) を知りたい」という期待があった。

②受講者の研修内容の理解度・満足度 (アンケートのⅢ①より)

「1. ほぼ一致した」と回答したのが4人、「2. だいたい一致した」という回答が5人で、受講者9人全員が期待と一致したと答えており、理解・満足度は得られたと考える。

③関心を高め、教育力の向上を促したと考えられる内容・活動 (受講者アンケートⅢ②の回答より)

本コース終了時に行ったアンケート結果を見ると、半数以上の受講者が「5. 非常に参考になった」と回答したのは、「外国人児童生徒の言語能力 (学習言語能力、母語との関係)」「日本語指導計画の立て方」「日本語指導の方法」であった。これらは、本コースの目標の一つである「外国語教授法を中心とした日本語教育の専門的な知識を実際の授業にどう活かしていくかを考え、教案・教材を作成することができる」を達成するためにコース全体を通して学んできたことであり、それが回答にも反映されたと考える。

事前の期待が高かった「外国人児童生徒の心理や接し方への関心」については、「外国人児童生徒等の

心理と適応」の回答において、9人のうち8人が「5.非常に参考になった」「4.参考になった」と答えており、こちらも一定の成果があげられたと考える。

「日本語の特徴」「保護者との連携」については、前者は地球っ子教室で子ども達の学習支援をしている時にどう答えていいか困ったという受講者が複数名いたが、その都度、個別にアドバイスをするのに留め、授業全体で扱うことはしなかった。「保護者との連携」についても、地球っ子教室の保護者会への参加の機会があったのにも関わらず、当日、参加したのは2名（1名は途中で退席）のみで、それ以外に保護者の状況や考えに触れる機会はほとんどなかった。そのため、「3.まあまあ」「2.あまり」が4人、残り5人が「5.非常に参考になった」「4.参考になった」という回答であった。

「最も参考になった内容」についての質問には、「地球っ子教室での実践」や「教案・教材などを実際に作成してみたこと」と回答した学生が多く、実践を通しての学びが有益だと感じられていることがわかる。

さらに、「他の受講者（クラスメート）との話し合いで自分とは違う意見、価値観を知ることができたこと」、「学習者の目線・教師の目線という捉え方を知ったこと」と挙げる学生が多く、自分一人では解決できない課題を仲間とともに考えることで学びを深めている様子がわかる。「どのようなタイプの授業が効果的か」という質問に、全員が「設定したテーマに関する話し合い」と回答していることから、講義型・知識伝達スタイルの授業よりも、お互いの気づきを引き出し合うような話し合い、学び合いがより効果的であることに改めて気づかされた。その他に「事例を聞く」「授業体験・指導案作成・模擬授業等の活動」のような実践や、経験者との対話を通して、受講者それぞれが納得して自分の中に落とし込んでいける場・機会と十分な時間が必要であることがわかった。

④受講者が今後に望む研修・授業の内容と活動（受講者アンケートⅣより）

「文法や単語の指導方法の練習」「具体的なゲーム例」など具体的な指導方法に関する回答が3名からあった。これは、3-(1)-③で「参考になった」と感じた受講者が半数だった「日本語の特徴」との関連と考えられるが、日本語の文法知識やその指導方法については、2年時に「日本語文法論」で学んでいるが、15回の授業で扱える範囲は限られるうえ、そこで得た知識を実践にどう活かすかは、実際に教えてみて試行錯誤を繰り返すうちに会得する部分も大きいだろう。このことから、一度学習した項目はそれで完了というのではなく、実践を重ねる中で繰り返し扱っていく必要がある項目もあると考えるべきであろう。

その他に、コース開始前の期待が高かった「外国人児童生徒の心理や接し方」や学校の現場での実践の様子についても、今後、学びたい内容として挙げられていた。4年時の小学校での日本語教育実習ではこうした機会が多く得られることを期待したい。

これらの学習方法については、③で述べたように、実践することも大事だが、それと同時に、実践で体験したことを共有し、解決策を探ったり、一緒にアイデアを練り合うことが非常に重要である。今回の受講者アンケートの結果から、筆者自身もこのことに気づかされた。

（2）研修企画の立場から見た、研修の成果と課題（企画者アンケートⅢの回答より）

今回、15回の授業を通して、成果があったと考える内容・方法は、

- ・「地球っ子教室」で実際に子ども達に教えた体験。2回活動に参加できたのも有益であった。
- ・「地球っ子教室」の実践後に、体験したことを共有し、話し合う時間を持てたこと（1回目は「地球っ子教室」のボランティアスタッフも交えて行った。2回目は学生と担当教員で行った。）
- ・ビリーフ質問紙を使ったビリーフ調査体験（第2回目、最終回の2回実施）と話し合い
- ・特に言語教育観については、自分が体験したことがない外国語教授法について知り、調べる機会があっ

たことで、外国語学習観にも影響があったようである。

以上のような点である。

一方で、15回の授業内容を「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修の内容構成（案）」の項目に照らしてみたことで、④「学校組織や教育行政」、⑦「学級経営と多文化共生教育」、⑭「現場での実践」、⑳「教科の内容」など、実際に学校の現場に関わることで得られる知識や、地域の支援教室では踏み込まない専門的な内容については網羅できないことが明確になった。本コースで扱った内容や活動は、4年時の小学校での実習に向けた直接的な準備になるものばかりではないが、学校から離れ、心身ともに少し開放される空間（土曜日開催の「地球っ子教室」）で見せる児童生徒の様子や学習の実態、地域のボランティア支援の実態を知るいい機会にはなったと考える。

また、受講生の一部が不安を払拭しきれずに終わった⑯「日本語に関する基礎知識・専門知識」とそれらを実践でどう生かしていけばよいのかという点は、実践の場で課題に直面し具体的にどうするのかを考えなければならなくなった時やふり返り時に、繰り返し話題にしていくとか、さまざまなケースを示し解決策を考える活動を取り入れるなど、工夫の余地がありそうである。今後の課題としたい。

本事例は、すでに専門分野の知識を得た大学生が、次年度に公立小学校で行う実習に向けてどのような学習が必要であるかを、内容、方法、学習効果という観点から検討するため、既存の授業（日本語教授法講義）の内容を見直し、実施した結果を検証・報告したものである。そのため、日本語教育学会(2018)『平成29年度文部科学省委託 外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業 報告書』に示されている多様なモデルプログラムを試し、検証するという趣旨からはやや外れた試みであった。

しかしながら、モデルプログラム例③「外国人児童生徒等受入れの現状と施策<基礎>講義型」や例⑪「母語・母文化・アイデンティティ<基礎>講義型」、例⑱「言語能力の把握<基礎>講義型」に類する内容を授業の一部に組み込んだり、例⑫「外国人児童生徒等の心理と適応<基礎>フィールド型」同様の課外活動を2回にわたり「地球っ子教室」で行うなどした。さらに、例⑲「個別の指導計画の立て方<専門>講義型」と「同 <専門>活動型」は、本事例の内容の一つの柱としてコース全体を通して扱っている。

さらに、前年度（対象学生2年時）の授業で行った留学生との協働プロジェクト「横浜に住む外国につながる人々～背景を探る～」を通して、モデルプログラム例⑥「社会的歴史的背景<基礎>講義型」や、例⑨「地域の支援ネットワーク<専門>講義型」の内容についてはグループごとに調査を行いポスター発表会をしているため、本授業内でもその成果について触れ、ふり返りを行ったりもする等、間接的ではあったが、様々なモデルプログラムを実施し検証することへ貢献できた部分もあるのではないかと考える。

また、日本語教育学会(2018)第5章 p.72-76に示された「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修の内容構成（案）」を参考にしたことで、これまでのカリキュラムからは抜け落ちていた内容や視点が確認でき、新たに加えたり、関連する授業の中で触れる等の対応ができた。

4. モデルプログラムについて

(1) 養成・研修内容構成（報告書 pp.72-76）について（意見）

- ・追加が必要な項目はないか。
- ・項目の構成（配置・カテゴリー化）は適当か
- ・項目の数や具体性は適当か。

養成・研修対象者によって、項目の構成やその内容の妥当性に差があると思うが、大学の教員養成課

程の学生を対象にした場合、おおむね妥当であったと考える。本事例で、どこにあてはまるか判断に困るケースはなかった。また、第6回協力者会議（2019年1月5日開催）の資料2-2に示された改訂案やモデルプログラム案の追加により、より使いやすくなりそうである。

ただし、「教師のビリーフ」という項目が⑭「言語能力の把握」に分類されていたことについては、やや違和感を感じた。ビリーフは学習者をどう把握するかということだけではなく、指導方法、授業等における意志決定にも関わる。⑮「現場での実践」や⑯「自己の成長、環境づくり」辺りにも関連があるように思う。さまざまな項目にまたがる例については、どんな理由でそこに分類されているのかを知りたいと思った。

（2）モデルプログラム（報告書 pp.207-244）について（意見）

・90分程度のモチーフ型のプログラムは、選択・組み合わせがしやすかったか。

3-(2)で述べた通り、本事例は既存の授業（日本語教授法講義）の内容を見直し、実施したため、90分のプログラムをまるごと使ったり、選択・組み合わせたりすることはしなかった。しかし、1回あるいは数回の研修などを組み立てる場合には、60分あるいは90分ぐらいのプログラムは参考にしやすいのではないかと思う。

・モデルプログラムは実施カリキュラム作成時に、参考になったか。

今回は、カリキュラムを作成した後にモデルプログラムと照らしてみたため、参考にして作ったとは言いきれないが、今後、新たなカリキュラムを作成する際や手直しをする際には参考にしたい。

・講義・活動・フィールドのバリエーションは、活動を考える上で役立ったか。

大まかな分類なので活動を考える上で役立ったというよりも、内容のバリエーションを意識化するのに役立った。

（3）モデルプログラムの活用で研修の運営が円滑になったか。

・現場の課題と研修内容を関連付け、受講者に目的を伝えやすくなったか。

・企画者と講師間で研修運営についての考えを共有しやすくなったか。

・複数回の研修の場合には、各回の関連付けがしやすくなったか。

特に運営が円滑になったということはないが、「養成・研修内容構成」（報告書 pp.72-76）があることで、途中でカリキュラムに修正を加える際に、偏りがないか、洩れがないかをチェックするには役立った。さらに、第6回協力者会議（2019年1月5日開催）の資料2-1「外国人児童生徒等教育を担う教員に求められる資質・能力」の表をセットにして持っている、偏り・洩れチェックに加え、授業や研修内容がどのようなスキルを上げるのに役立ちそうかも確認できると思う。

（4）モデルプログラムの活用を通して、研修・養成で、どのような力を高めてほしいか。あるいは、高めるためには、どのような活用の仕方が必要だと思うか。

- ・本事例においては、⑯「日本語に関する内容」を、⑮「実践に変える力」を高めること、つまり、既習項目である日本語の基礎知識（文法、語彙など）をもう一度、思い出し、それらを、学習対象者に合った方法で導入し使えるようにする力を高めることが必要であり、受講者の要望としても挙がっていた。これは一朝一夕に獲得できるものではないと思うが、繰り返し実践の場を持つことで、PDCAサイクルを当たり前のこととして行う習慣を身につけてほしい。その時に、自らの外国語学習の経験や、既成概念に縛られず、広い視野で考える態度・気持ちを養ってほしい。
- ・モデルプログラム全体については、モデルプログラムの例はあくまでもたたき台であって、そのまま

使ってもよいが、それぞれの養成・研修参加者のニーズや状況に合わせて、取捨選択をしたり、別の内容を加えたり、適当に変更しながら実践するものと理解している。こうした担当者自身のアレンジ力もつけていくことが望ましいのではないかと。第6回協力者会議（2019年1月5日開催）の資料2-2に示された改訂案「1 改訂のポイント」⑤は、活動内容を減らすことも一案だが、選択肢としてその内容を示しておき、時間配分あるいは目的に応じてこのようなバリエーションがあるという例を示すのもいいのではないと思う。

・研修・養成いずれの場合でも言えると思うが、外国人児童生徒等教育を担う教員に求められる資質の大事な要素として「自分にとっての当たり前を見つめ直し、他者の見方や考え方を推測したり知ろうとすることができる」という点があるように思う。その一助として、ビリーフ調査が有益ではないかと考える。報告の資料6 p.165-168に示された「養成に関するアンケート（教員養成課程・受講者用）」には、受講前・後に行う質問項目に「Ⅲ 外国人児童生徒教育・日本語指導についてのお考え（受講者のビリーフ）」を問う質問項目があり、その成果・報告も大変興味深いものであった。しかし、今回の検証事業で採用されたアンケートからはビリーフに関する質問が除外されていた。恐らく、アンケート回答者への負担を少なくするための配慮や、単回の研修であった場合、研修前後で回答を得てもビリーフ（受講者の信念とも言える学習観等の核）の変容とまでは言い切れないという理由によるものではないかと推測する。しかしながら、本コースの授業で行った活動（受講者自身が自分のビリーフの要因を探る、受講者同士でお互いのビリーフ質問紙を見比べて話し合うこと）では、受講者が多様な考え方・見方に気づくきっかけとなっていた様子であった。また、ビリーフ質問紙の質問自体が、今まで考えたこともなかった視点に気づかせてくれるメッセージとなる可能性もある。今後もモデルプログラムの実践とともに、その成果を確認する「養成に関するアンケート」を行うのであれば、ぜひビリーフに関する質問項目も入れていただき、これを活動自体に組み込む方法も試みたいのではないと思う。